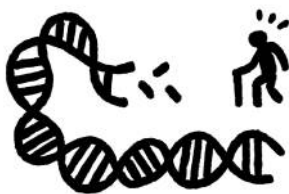


戦前と戦中、日本人の死因のトップは結核でした。しかし、2016年の死亡数は1889人で、死因順位では28位にすぎません。結核による死亡が減ったのは「ストレプトマイシン」のような抗生物質が普及したからではありません。栄養状態が改善して免疫力がアップし、結核にかかる人が激減したことが主因だと思います。

結核に代わり、戦後しばらく日本人の死因のトップだった脳卒中も1970年代以降は減少に転じます。これも、喫煙率の低下、減塩などの他、十分な動物性タンパクの摂取によって血管が強くなったことが背景にあると思います。結核と脳卒中は「途上国型」

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

免疫力アップでがん予防

高齢化にあります。がん細胞は遺伝子の「経年劣化」によって、正常な細胞が不死化したものです。毎日体内に発生するがん細胞は年齢とともに増えていきますが、免疫細胞が未然に撃退しています。これを「免疫監視機構」と呼びますが、免疫力も年齢とともに衰えていきます。サッカーに例えればキックオフとともに

の割合は6割を超えますが、55歳までは5%程度にすぎません。しかし65歳までだと15%、75歳まででは3割以上となります。定年前後からがんのリスクが急増します。国民病ともいえるがんですが実は、年齢構成をそろえた「年齢調整死亡率」は90年代後半から減り続けています。もっとも人生100年を見据えて長く働く時代ですから、「高齢化の影響を除けば、昔よりがん死亡は減っている」といってもナンセンスでしょう。

の病気といえるでしょう。

一方、がん死亡は戦前から現在にいたるまで一貫して増え続けています。81年には死

と、85年の約2倍になりました。現在、がんは死因全体の3割を占め、2位の心疾患の約2倍、3位の肺炎の約3倍

に相手の選手の数が増え、見方の守備力が疲弊していくようなものです。がんは一種の老化といえる病気ですから、

昔より遠くなったセカンドライフをハッピーにするためにも、がんを防ぐことが大事になっていきます。

因のトップに躍り出て、16年の死亡数は37万2986人

がんの急増の理由は急速な

男性は生涯でがんになる人

(東京大学病院准教授)